

“ユブシキノコ”の同定とその民俗*

星野 保†・岸岡 健太††

Identification of “Yubushi-kinoko” and their folklore

Tamotsu HOSHINO and Kenta KISHIOKA

ABSTRACT

Bracket fungi were used for medical purposes and tinder or mosquito repellents in Japan. The fungal species repel mosquitoes from the central main island (Chubu region) and south were identified, but not in the northern main island (Tohoku region). Iwaizumi Museum of History and Folklore in Iwate Prefecture, northern Japan, kept the specimens of “yubushi-kinoko” (smoked mushrooms in the northern Iwate dialect) to repel mosquitoes. We identified these specimens as *Daedalea dicknsii* and recorded their folklore in Iwaizumi, Iwate, northern Japan.

Key Words: bracket fungi, *Daedalea dicknsii*, insect repellent, Iwate, Iwaizumi, mosquito repellent

キーワード:サルノコシカケ, ホウロクタケ, 虫よけ, 岩手県岩泉町, 蚊火, 蚊遣り, 蚊よけ

1. はじめに

きのこ類は、古くから食用・薬用としての用途が知られている。サルノコシカケなどの硬質菌類は、これに加え、^{ほくち}火口としての利用が記録されている（福井県編 1993, Peintner ら 1998, 国立科学博物館編 2014）。さらに子実体に火を付け、煙を出すことで、虫よけとして使用する例が、岩手県（植田 1997）、同岩泉町（岡 2008, 岩泉町歴史民俗資料館 2022）、同宮古市（旧川井村, 宮古市北上山地民俗資料館 2017, 2023, 宮古市北上山地民俗資料館小国分館友の会 2017, 名久井 2023）、宮城県栗原市（旧栗駒町, 斎藤たま 民俗調査カード集成）、同大和町（桂山 1972, 千葉 2017）、同仙台市（旧秋保町, 三原 1983）、福島県喜多方市（上田 1964）、長野県（信州きのこ研究会・田中 1982）、岐阜県揖斐川町（旧坂内村, 斎藤たま 民俗調査カード集成）、同東白川村・中津川市・高山市（旧朝日村, 脇田 1991）、奈良県十津川村（斎藤たま 民俗調査カード集成）、宮崎県椎葉村（黒木 2010）で知られている。北欧や北米にも同様の習慣がある（Kari 1977, シモン・松山 1983, Turner・Cuerrier 2022）。なお、蒲生（1964）は、福島県田村市（旧滝根町神保）にこの習慣は無いと記しており、脇田（1991）も岐阜県内での虫よけとしての使用が限定的と記した。また、アイヌ民族では、ツリガネタケ *Fomes fomentarius* を火口としての使用以外

* 令和5年12月15日 受付

† 工学部工学科・教授

†† 岩泉町歴史民俗資料館

に、幌別では疫病の流行あるいは魔物の出現の噂のある場合、魔よけの意味でこのきのこに火をつけ、終夜戸外に放置しておいたとされる (知里 1976)。

虫よけに使用される菌類については、不明な点が多く、長野県ではカンバタケ *Fomitopsis betulina* とシロカイメンタケ *Piptoporus soloniensis* を用い (信州きのこ研究会・田中 1982)、関東より西ではシロカイメンタケが多く使用された (脇田 1991, 根田 2003)。また、盛岡うえっこの会・青森市森林博物館友の会 (1992) は、カンバタケについて「昔、このきのこに火をつけ煙をだし、蚊やりに用いたという」と記したが、これが岩手・青森両県における使用例かは不明である。

福井県若狭町鳥浜貝塚の出土品は、蚊よけの用途に使用された可能性もあり、これはコフキササルノコシカケ *Ganoderma applanatum* とされる (福井県編 1993)。



図1 岩泉町歴史民俗資料館のユブシキノコ

一方、関東以北では不明であった。また、地域は不明であるが、ツガノサルノコシカケ *Fomitopsis pinicola* (寺田 1927)、カンバタケ、ミダレアマタケ *Cerrena unicolor* (逸見・赤井 1945 は、ミダレカシタケ *Daedalea unicolor* と記述しているが、勝本 2010 に準じて修正した) の利用が報告されている。さらにシモン・松山 (1983) は、スウェーデン北部でツリガネタケが蚊よけにも使用されると記した。Turner と Cuerrier (2022) は、カナダ先住民の菌類利用の調査を通じて、キコブタケ *Phellinus igniarius*、ホコリタケ類 (*Lycoperdon* spp., *Geastrum* spp. および *Calvatia* spp.), カンバタケが蚊よけに使用されることを報告し、米国アラスカ州のアサパスカ族は、コフキササルノコシカケに火をつけて蚊よけに使用した (Kari 1977)。

岩泉町歴史民俗資料館 (以下、資料館と略称) には、蚊よけとして使用される硬質菌類を“ユブシキノコ”として展示している (図1)。ユブシは、“燻す”の方言とされる (植田 1997, 岩泉町歴史民俗資料館 2022)。九戸郡誌 (岩手県教育会九戸郡部会 1986) には、類似の呼称 (ゆぶしきのこ) をカワラタケ *Trametes versicolor* と記しているが、資料館の標本は、カワラタケとはその形態が大きく異なり、典型的なサルノコシカケ型であった。また、岩手県宮古市 (旧川井村) で蚊よけにホゴチキノコあるいはカスブキノコと称するきのこを用いた (宮古市北上山地民俗資料館 2017, 2023, 宮古市北上山地民俗資料館小国分館友の会 2017)。“かすぶ”とは、マルバアオダモの樹皮を筒状にして容器を作り、ヒエ糠を入れた上にカスブキノコをおき、火をつけて煙を出し虫よけにしたものである (宮古市北上山地民俗資料館 2017, 2023, 名久井 2023)。

宮城県栗原市 (旧栗駒町松倉) では、きのこ採りなどのヌカカよけに用いるサルノコシカケを“ブスキキノコ”と称した (斎藤たま 民俗調査カード集成)。日本国語大辞典では、この呼称に“付子茸”の字を当て、①毒きのことして、仙台・青森県三戸郡・岩手県上閉伊郡・山形県東田川郡・西田川郡にて、②食用とならないきのことして福島県、③サルノコシカケとして青森県弘前・津軽地方にて、④キツネノチャブクロとして岩手県九戸郡で称されるとある (日本国語大辞典第二版編集委員会

2000). 宮城県栗原市の事例は、③の使用法と推定され、東北地方において、蚊よけに使用される硬質菌類に多様な呼称があったことが推定される。宮城県仙台市太白区(旧秋保村二口)では、サルノコシカケをフクジュキノコと称し、竹や木の先に挟んで点火したものを腰にさして、野外作業の際、蚊よけに用いた(三原 1983)。同様の呼称、“フクジキノコ”(福寿)は、火口に使用するサルノコシカケ以外の事例が福島県須賀川市で知られる(相楽 1964)。

なお、きのこの方言を収集した松川(1980)、奥沢・奥沢(1998)は、“ぶし”、“ふしきのこ”、“ぶしきのご”、“ぶす”、“ぶすきのこ”、“ぶすきのご”、“ぶすたけ”の呼称で東北地方を中心に多様なきのこに用いられていたことを記録しており、“ふしきのこ”は、青森県弘前でサルノコシカケ類の総称を指す。これらの呼称に関して松川(1980)は、『有毒なキノコ、役立たずのキノコ一般につけられた名前だが、不思議に東北で使われることが多い』と記している。

本研究では、資料館の標本を基にユブシキノコの同定を試みると共に、ユブシキノコの採集・使用などの記録をまとめ報告する。

2. ユブシキノコの形態的およびその用途と関連する特徴

標本の特徴は以下の通りである。子実体は無柄、側生、一部は重なって子実体を形成し、基部でつながっていた。カサは半円形、幅 6–12 cm、厚さ 1–2 cm、基部は 5 cm 以上に達する場合もある。縁は鈍端。背面は淡褐色からこげ茶、同心円状の凹凸あるいは、こぶ状の隆起をもつ。孔口は多角形、1–2 個/mm。孔長 2.5–10 mm、肉は淡褐色。これら特徴を基に、今関・本郷(1989)の記載から本種をハウロクタケ *Daedalea dickinsii* と同定した。また、宮古市北上山地民俗資料館の標本、“蚊ゆぶし”(No. 12485) および“蚊ゆぶしキノコ”も同様の形態から同種と判断した。本種は国内に広く分布し(今関・本郷 1989)、工藤(2009)は、本種が東北地方のブナ・ミズナラ林の普通種であると記している。

多孔質かつ、繊維状で厚みのある肉質を有する本種の形態的特徴は、火付き・火持ちがともに良く、火口・蚊よけに適した性質を有していた。上田(1964)が報告した福島県会津熱塩温泉の蚊よけに使用するサルノコシカケの種は不明であるが、ナラの枯木に発生し、その写真(掲載誌の表紙)から、ハウロクタケと類似の特徴を有すると判断した。一方、宮古市北上山地民俗資料館の標本、天ぶら油缶を用いた“かすぶ”(No. 9521)の“かすぶキノコ”の孔口は迷路状であり、他の標本とその形態が大きく異なっていた。

また、使用された地域は不明であるが、養蜂用燻煙の材料としてもちいられた硬質菌類が“ゆぶしきのこ”と称され、これもハウロクタケであるとされる(<https://slowly-slowly.com/kunenki/>, 2023年11月15日閲覧)。逸見・赤井(1945)は、カンバタケ、オオミダレカシタケも養蜂用燻煙に用いたと記した。

3. ユブシキノコの民俗

植田(1997)は、岩手県読者からの連絡として“ついこの間まで、この辺では『ゆぶしきのこ』(ゆ

ぶす=いぶす)という茸を使って虫よけをしていたそうです。檜の朽ち木にはえるので、山で下草刈りの時を取ってきて、乾燥させます。雑草取りの時に、腰につけた缶に火をつけたゆぶしきのこを入れ、その煙で蚊を追い払う”と記している。岡(2008)は、ユブシキノコについて『山から採集してきて乾燥させておき、火をつけて農作業などの際の虫除けに用いた』と短く記述している。ユブシキノコの民俗に関して、資料館だより(岩泉町歴史民俗資料館 2022)により詳しく記述されている。ここでは、採集は天気の良い日にしかしないこと、乾燥したユブシキノコは、勢いよく燃えるのではなくひたすら煙を出し、一度、火がつけばなかなか消えず、火持ちがよいこと、穴を開けて紐を付け、着火した状態で腰にぶら下げて使用したこと、消す際には土に刺したなど、住民3名の証言として記されている。

宮古市では、火をつけた“蚊ゆぶしキノコ”を『細い竹や木の枝などに取り付けて腰の帯やベルトにさして身につけて使いましたが、この他にもキノコを取り付けた竹や枝を地面にさして固定して使う方法もありました』とした(宮古市北上山地民俗資料館 2023)。

岸岡がおこなった聞き取り調査では、さらにユブシキノコはカヤブシとも称されたこと、採集後、屋内の乾燥しやすい場所に保管したこと、かつて使用された状況としては草むしりなどの屋外作業が一般的で、近年でも高齢者が就寝前に家の中で燻して蚊よけとする例や、山間部の集落において、屋外でのバーベキューの際に足元に置くなどして用いる例も聞かれた。類似の素材としては劣化した衣類などを縄のようにしたものを“火縄”と呼び、やはり虫除けの煙を出すものとして用いた。

4. おわりに

星野は、新聞コラムにユブシキノコを紹介した際、着火したサルノコシカケ類を蚊よけに使用する事例は、岩手県・長野県のみであると記しているが(星野 2021)、本稿作成にあたり、さらに詳しく調査した結果、国内各地で同様の事例を確認した。資料館に展示されているユブシキノコは、その形態から東北地方のブナ・ミズナラ林に広く見られるハウロクタケ *Daedalea dickinsii* であることを明らかにし、その利用方法などをまとめた。

また、岩手県宮古市(旧川井村)で同様の用途に使用される“かすぶキノコ”は、その形態が大きく異なり、ハウロクタケではない可能性がある。今後、さらに同定に必要な調査を進めたい。東北地方には、これ以外にも様々な菌類利用法や発酵食品が存在する。今後も菌類民俗学とも言える分野での調査を続け、地域特性の把握と知識継承の一端を担っていきたい。

謝 辞

ユブシキノコの同定およびその利用に関して有益なご意見を頂いた慶応義塾大学 糟谷大河博士、森林総合研究所 服部勉博士には深く感謝致します。また、船形山におけるサルノコシカケの虫よけ使用に関する文献をご教示頂きました千葉文彰様には、この場を借りて感謝致します。

参考文献

- 今関六也・本郷次郎 (1989) 原色日本新菌類図鑑 (II), 保育社, 東京, pp. 154
- 岩泉町歴史民俗資料館 (2022) 資料館だより～蚊よけになるキノコ～. 2022年9月9日
- 岩手県教育会九戸部会 編纂 (1986) 九戸郡誌 (岩手県郷土誌叢刊), 臨川書店, 京都
- 植田 (1997) 質問コーナー あなたの地域の虫よけ方法は? 食品と暮らしの安全 100: 20
- 上田亀彦 (1964) キノコの民俗一會津熱塩温泉周辺一. 民間伝承 263: 41
- 岡恵介 (2008) 視えざる森の暮らし 北上山地・村の民俗生態史, 大河書房, 東京, pp. 114
- 奥沢康正・奥沢正紀 (1998) きのご語源・方言辞典, 山と溪谷社, 東京, pp. 515-517
- 勝本謙 (2010) 日本産菌類集覧, 日本菌学会関東支部, 東京
- Kari PR (1977) Dena'ina K'et'una (Tanaina Plantlore), Adult Literacy Laboratory, Anchorage Community College, Anchorage, pp. 159
- 桂山新一 執筆者代表 (1987) 改訂 船形連峰御所山案内, 船形連峰御所山開発促進期成同盟会, 色麻町, pp. 196
- 蒲生明 (1964) 天狗の腰掛その他. 民間伝承 263: 30-31
- 工藤伸一 著・長沢栄史 監修 (2009) 東北きのご図鑑, 家の光協会, 東京, pp. 200
- 黒木秀一 (2010) 宮崎県のきのご方言と民俗. 宮崎県文化講座研究紀要 37: 69-92
- 国立科学博物館 編・細矢剛 責任編集 (2014) 菌類のふしぎ 第2版 形とはたらきの脅威の多様性, 国立科学博物館叢書, 東海大学出版部, 平塚, pp. 171
- 斎藤たま 民俗調査カード集成, 東京文化財研究所 (<https://www.tobunken.go.jp/materials/saito-tama>, 2023年11月6日閲覧)
- 相楽丑之助 (1964) キノコに関する返信. 民間伝承 263: 28
- シモン・松山忍 (1983) スウェーデンで盛んなキノコ採り. 北方圏 45: 70-72
- 信州きのご研究会・田中豊雄 (1982) 信州きのご百科, 信濃毎日新聞社, 長野, pp. 191
- Turner NJ, Cuerrier A (2022) 'Frog's umbrella' and 'ghost's face powder': the cultural roles of mushrooms and other fungi for Canadian Indigenous Peoples. Botany 100: 183-205
- 千葉文彰 (2017) 船形山からのブナの便り (ブログ版) 2017年08月16日 サルノコシカケの効用と秋の気配 (<https://bunatayori.exblog.jp/26895298/>, 2023年11月6日閲覧)
- 寺田正一 (1927) キノコ (一) 日常生活とキノコ. 日本薬報 第2年 (2): 8
- 知里真志保 (1976) 知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編, 平凡社, 東京, pp. 248
- 名久井文明 (2023) 北上山地の民俗事例が意味するもの. 令和5年度宮古市北上山地民俗資料館企画展「失われゆく道具や技術～活動のあゆみと調査報告」
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編 (2000) 日本国語大辞典, 小学館, 東京
- 根田仁 (2003) きのご博物館, 八坂書房, 東京, pp. 47-46
- 福井県 編 (1993) 福井県史 通史編 1 原始・古代, 福井県, 福井, pp. 72-73
- Peintner U, Pöder R, Pümel T (1998) The iceman's fungi. Mycol Res 102: 1153-1162
- 逸見武雄・赤井重恭 (1945) 木材腐朽菌学, 朝倉書店, 東京, pp. 207-208
- 星野保 (2021) ふみづくえ 岩手の3大すごい菌. デーリー東北 2021年11月3日 10面
- 松川仁 (1980) キノコ方言原寸原色図譜, 東京新聞社出版局, 東京, pp. 167
- 三原良吉 (1983) 二口谷の民俗, 宝文堂出版販売, 仙台, pp. 118
- 宮古市北上山地民俗資料館 (2017) 資料の記録から◆「蚊ゆぶし」について. 資料館だより No. 23
- 宮古市北上山地民俗資料館 (2023) 第26回企画展「失われゆく道具や技術～活動のあゆみと調査記録の報告～」 令和5年10月1日 (土)～12月24日 (日)
- (http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp/index/special/exhibition/exhibition_202310.html, 2023年11月18日閲覧)

宮古市北上山地民俗資料館小国分館友の会 (2017) 平成二十八年度の活動◆名久井文明先生の研究に協力して、サンナメ
樹皮の加工について記録しました. 小国分館友の会 会報 4:3

盛岡うえっこの会・青森市森林博物館友の会 (1992) 身近なきのこ, トリョーム, 盛岡, pp. 142

脇田正彦 (1991) 岐阜県のホクチについて. 信濃 43: 159-178

要 旨

サルノコシカケなど硬質菌類は、薬用以外に火口や着火して蚊よけにも使用されていた。これまでに中部以南で蚊よけに使用された硬質菌類の種は判明しているが、東北地域では不明であった。このため“ユブシキノコ”の名で、岩手県岩泉町歴史民俗資料館に保管されている蚊よけに使用された硬質菌類の種同定をおこない、形態的特徴からハウロクタケあることを明らかにすると共に、この使用習慣に関する記録を記した。

キーワード :サルノコシカケ, ハウロクタケ, 虫よけ, 岩手県岩泉町, 蚊火, 蚊遣り, 蚊よけ